

感染症と正しく向き合う

日本病院薬剤師会理事
山口大学医学部附属病院薬剤部
北原 隆志 Takashi KITAHARA



今年度から感染制御専門薬剤師部門の部門長を拝命いたしました。何卒よろしくお願い申し上げます。

2003年の重症急性呼吸器症候群 (severe acute respiratory syndrome : SARS), 2012年の中東呼吸器症候群 (middle east respiratory syndrome : MERS), 2015年にはエボラウイルス感染症, 前回のリオ五輪があった2016年には中南米を中心にジカウイルス感染症と, 世界的には未だ多くの感染症が問題となっています。感染症に対する危機感を忘れてはいけなと思います。本邦でも2014年にデングウイルス感染症が話題になったものの蚊媒介性であり, ヒトからヒトへ直接感染しないことや比較的予後良好なことから, 感染症に対する危機感というものは一時的であったように思います。しかし, 今年は新型コロナウイルス感染症という近年では経験したことがない未曾有のパンデミックが全世界に広がっています。ここで立ち止まって感染症と正しく向き合うことを考えなければならない時かと思えます。

2015年に世界保健機構 (WHO) がGlobal Action Planとして薬剤耐性 (antimicrobial resistance : 以下, AMR) 問題に対する指針を打ち出したことは, 医療関係者であれば周知のことかと思えます。本邦でもこれを受けて2016年にAMR対策アクションプランを発出し, 2020年である今年がその最終年となっていました。抗菌薬の使用量を全体として33%削減 (対2013年) するという数値目標が挙げられていましたが, 2018年の使用量は10.6%減に留まっています。2018年の診療報酬改定で抗菌薬適正使用支援加算が新設されたことから, 多くの感染防止対策加算1施設では抗菌薬適正使用支援チーム (antimicrobial stewardship team : AST) が組織され, 薬剤師が専任あるいは専従という形で参画しています。抗菌薬使用に対するの行動変容への薬剤師の役割は非常に大きいです。

ジョン・P・コッター教授は「企業変革力」で, 大規模な変革を推進するための8段階のプロセスを示しています。感染制御の考え方と取り組みを国民に浸透させるというミッションを実現させるには大きな改革が必要になります。このミッションの実現のためにプロセスを当てはめると, コッター教授は1段階目として「危機意識を高める」ことを挙げているのですが, 現在コロナ禍の影響でこのステップにあると考えられます。この危機を好機に転じ, 次のステップである「変革を推進する連帯チームの構築」, 「ビジョンと戦略を立てる」, 「変革のためのビジョンを周知徹底する」と進めることで, 感染制御における国民の行動変容を確実なものにできるのではないかと考えます。2019年に国立国際医療研究センターが一般市民に対して実施したアンケートでは, 風邪に抗菌薬が有効であると思っている人の割合は未だ64%もあり, 風邪で受診した時に処方してほしい薬として31.7%の人が抗菌薬と答えています。

コロナ禍により国民が感染症に高い関心をもつことで, これまでなかなか浸透しなかった手洗い, 手指消毒の重要性が理解され, またウイルス感染症には抗菌薬は効かないということも周知されつつあることは, 感染症と正しく向き合うことを進めるうえで好機になり得ると思います。感染対策チームでの活動や, その活動ビジョンにおいて薬剤師がその役割を十分に発揮できるように取り組んでいきたいと考えています。